

日々の小さい事の積み上げが、自分を成長させてくれる。

株式会社カラーズ代表取締役： 栃木 直美

相手に喜んでもらうことが好き

眼差し柔らかく、「基本、人が大好きなんです」と微笑みながら静かに語る栃木直美さん。4年前に㈱カラーズを設立し、リフォームと外構エクステリア工事を手がける。社長として、家庭では主人と4人の娘さんの良き妻、母として、毎日フル回転でアクティブに、今を楽しんで生きています。専業主婦から一転して会社経営をするようになった彼女が、ずっと貫き通しているのは「普通の『おばさん』にならない」という単純な思いと、相手に喜んでもらうのが嬉しくてたまらないという気持ち。これが、意外に奥が深い。おばさん化する



Profile

栃木 直美 (とちぎ なおみ)

昭和39年10月1日生まれ46歳。栃木県立栃木商業高等学校卒業後OLとして働き、26歳で結婚。専業主婦として4人の娘を出産し育てながら、36歳でパートとして働き出す。その後、町田ひろ子アカデミートリニ校ガーデンプランナー科で学び、ガーデンプランナーとインテリアコーディネーターの資格を取得。43歳で㈱木の花ホームの姉妹店である㈱カラーズを設立。趣味は、アウトドア(キャンプ・ハイキング)そして、月1回の夫婦ゴルフ。



超ポジティブな人間

「主人には、家事や育児はもちろんのこと精神

パートでも、本当に心を込めて人に接する。「そうしないと気がすまない性格」なんだとか。改めて「人の個性が色とりどりあるように、お客様ひとりごとのカラーを活かせる会社になりたい」と願った。カラーズという社名に納得。

「日々の小さい事の積み上げが今に通じていて、出会うた人や仕事を通して、人間として成長させてもらっています。全部つながっているんですね。実力以上の仕事をさせてもらったことで、自分が成長できる。こんな幸せはありません」と言いきる。

ためには、外見的にも内面的にも常に自分を磨かなければならない。相手に喜んでもらうには、相手の立場になって物事を考えなければならぬ。94歳の一人暮らしのおじいちゃんか納屋の改修を任せられ、打ち合わせで何度か話す中で、「栃木さんとこうして家の事を話しているうちに、自分の先々のことも考えるようになったよ...。母屋とお風呂もきれいしてもらって、気持ちよく暮らして行きたいな...と。本当にありがたい言葉で元気をいただいたと同時に、頑張っている自分へのご褒美の言葉だと感じた」と瞳を輝かせて嬉しそうに語る。手すりひとつにも、相手の身になって考え、わからないことはとことん勉強する。仕事でもプライ

的にもサポートしてもらっています。近くにあるお互いの実家もするずる巻き込んで...。本当に感謝しています」と言いつつも、甘えは感じられない。朝5時半に起きて、家族の食事と子ども達のお弁当を作り、8時には出社。社長業はもちろん、営業、現場監督、新入社員研修などもこなす。昼食も仕事をしながらおにぎりをかじる...なんてこともざらにあるほど。夜9時頃に帰宅して、洗濯や片付け、おかずを作りながら家族との団欒を楽しむ。かなりハードなスケジュールもなんなくこなす。しかも、楽しんでやっているのが実。そして、何よりも、誰に対しても「ありがとう」と素直に言える気負いのない謙虚さが素晴らしい。

「超ポジティブな人」と主人や子ども達に言われるほど、ストレスを感じないんですよ。もちろん、仕事で悔し涙を何度も流し、車の中でくっすく、と大声を出したこともあるんですけど」と笑う。つまり、ストレスをストレスと感じない、そのしなやかさが、仕事とプライベートの両立の秘訣だったのだ。「物事いいように考えないか」とね。根っこからそういう性格なんだとか。それは、やさしく人が好き、物作りが得意で、いつも先祖や人に感謝していた。今は亡きお父さんから譲り受けたもの。そして、主婦としてずっと家族や人の為に尽くしているお母さんの姿から学んだもの。「とっっても仲良かったんですよ」という本人も、今は、娘さん達に「お父さんとお母さんが仲良しでよかった」と言われている。

まだまだ夢の通過点

そもそも、この道に進むきっかけは、お父さんと一緒にやった日曜大工の影響もあったようだが、自分の家を建てた時、まったく理想どおりに行かず後悔だらけだったことが大きい。「建築会社の担当者ももっとアドバイスしてくれたら...。生涯で一番大切で大きな買い物なのに、こんな後悔は嫌だ」という思いが、建築業界に身をおくことを決意させた。半年間東京の専門学校に通い、見事資格を取得。その後木の花ホームに勤務し、姉妹店を開いた。「当たり前のことを当たり前にやる。でも当たり前前の基準が日々向上しなくてはいけない。心をまっすぐにして誠意をつくす(至誠)。覚悟を決めて仕事をやる」が、木の花ホームで教わったこと。そして、今では、自分自身の指針にもなっている。「衣食住のたいせつな住。この深いところまで人と関わり、プロとしての知識と主婦、母としての経験をフルに生かし、お客様の、住まいをより快適に提案できるこの仕事が本当に楽しくて仕方ない」と。今大切にしているものは、お客様、社員、家族自身を取り巻く人達との時間。時間を見つけては、自分の思いを語り、伝え続ける。

「今は、まだまだ夢の通過点。昨日、今日、明日と、自分の成長が実感でき、形としても残り、お客様の喜びの声も聞ける。そんな好きな仕事に出会えた幸せと、支えてくれたいる全ての人に感謝しています。」
出会いを偶然と思うか必然と思うか。チャンスと思うか思わぬか。「何かいいものないかな」という受身ではなく何かをつかもうと行動するパワー。アンテナを高くして、自分と違う考えにも「そういう考えがあるんだ」と受け入れる姿勢。そして「まだ、まだ...」と常に前へ前へと進もうとする彼女の姿に、生きるとは何かのヒントをもらった。